

「小児自己免疫性疾患患者におけるミコフェノール酸モフェチルの血中濃度と治療効果・安全性についての関係の検討」の公表について

感染免疫科では、小児リウマチ性疾患をもつ多くの患者様を診療させていただいている経験を基に、国内における診断や治療に関する問題点など様々な情報を発信しています。

近年自己免疫性疾患に対する MMF の効果を示す報告が増加し、当科においても、腎不全を合併するループス腎炎、既知の治療の効果が不十分な自己免疫性疾患、副作用で既知の薬剤が使用できない方について、MMF を治療選択のひとつとしています。昨年、ループス腎炎に対して MMF（商品名：セルセプト）が保険収載され、今後本邦においてもさらに使用症例の増加が予想されます。当科ではミコフェノール酸モフェチル（MMF）にて治療を行っている患者様に対し、投与量を適切に調節するために血中濃度を行い、薬剤の調節を行います。現在、こうして得られた血中濃度の結果を活用し、血中濃度と臨床経過・年齢・副作用などとの関係について解析を行っております。今後、論文での公表を予定しておりますので、お知らせいたします。

MMF は、自己免疫性疾患の治療において重要な薬剤と考えられていますが、小児例においては、疾患や重症度、年齢毎の MMF の至適投与量は確立されていません。MMF の血中濃度と臨床情報との解析を、個人レベルではなく、集団として行うことで、投与量を決定するうえでの一助となるのではないかと考えています。

今回対照となるのは、当科において MMF の血中濃度モニタリングを行った患者様約 30 名と、今後治療中に血中濃度モニタリングを行う方がよりよい管理ができると判断して測定を行う患者様です。

本研究には、個人を特定できるような情報の開示は含まれていませんが、調査対象に該当する患者様を含め、公表内容についてお問い合わせの際には以下までご連絡をお願いいたします。

あいち小児保健医療総合センター 感染免疫科